

IV-32 身体障害者の外出特性に関する考察

東京都立大学工学部 学生員 阿久津英雄
東京都立大学工学部 正会員 秋山 哲男

1. はじめに

1981年に「国際障害者年」を迎え、障害者も健常者と同等の社会参加ができるようにと、多くのまちで、身障者にとっても暮らしやすい「まちづくり」が行われている。そこで、身障者が暮らすうえで最も障害となっている移動の問題を考える意味で、「外出回数」を取りあげた。

2. 調査の概要

調査は、町田市在住の身障者を対象とし、アンケート留置法を用いて、700票配布し、有効回収率は約41%（票数290）であった。有効回答者の内訳は、男が約65%、非老人（＜60才）が約80%、また、常勤が約40%、パート約4%、学生約10%、その他約46%であった。障害の内訳は、体幹機能障害約40%、下肢機能障害約25%、視覚障害者、その他の障害（主に聴覚障害者）がそれぞれ約15%であった。

3. 年齢別、就労状況別平均外出回数

まず、ここでいう「外出回数」とは、ある目的を果たす為に外出したとき、その目的での外出回数が1回と数える。つまり、1回の外出で2目的果たしたときは、それぞれの目的での外出が1回ずつとする。次に、外出目的の「合計での外出」とは、外出回数そのものである。また、以下に述べる外出回数とは、表-1に示す換算値を用いて求めた平均外出回数を指す。では、図-1に身障者と健常者の老人と非老人の外出回数を主な目的について示す。この図によると、外出の主目的である「日常の買物」、「通勤・通学」が健常者と比べたいへん低く、身障者は外出に際して、なんらかの大きな制約を受けていると言える。また、身障者の老人が健常者の老人と比べ「通勤・通学」が多いのは、福祉作業所などに通っている人が多い為と思われる。次に、図-2に示すように就労状況別外出回数をみると、一般に「常勤」の人の外出回数が高いがこれは、働いている人には、比較的障害が軽い人が多い為と思われる。

4. 身障者の移動制約

4. 代りの人によってもらう回数と目的

身障者自らの外出が困難な為、代りの人によってもらう回数と目的を図-3に示す。この図によると、約7割の人が最低月1回は頼み、かつその主な目的は、買物・病院などであった。このこ

表-1 外出回数換算表

ほぼ毎日 = 1.00	月1～2回 = 0.05
週3～4回 = 0.50	月1回以下 = 0.02
週1～2回 = 0.21	行かない = 0.00

図-1 目的別外出回数

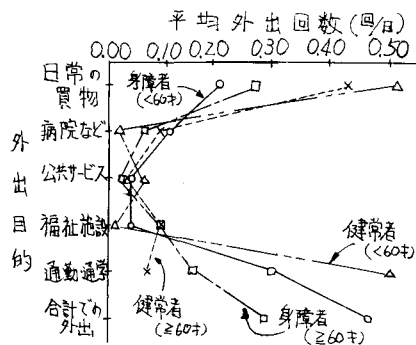


図-2 就労状況別外出回数

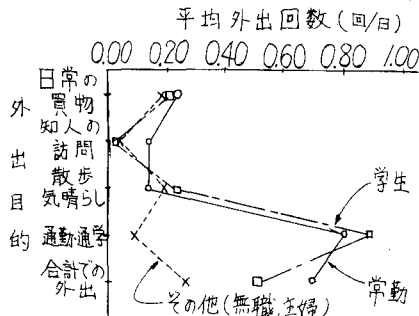
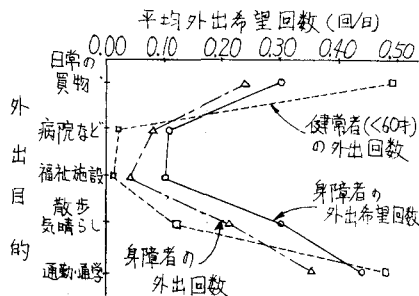


図-3 代りの人によってもらう回数・目的

回数:	ほぼ毎日 9.1%	週3～4回 10.3%	週1～2回 16.0%	月1～2回 32.6%	月1回以下 28.6%
目的:	日常の買物 28.0%	遠い所の買物 2.1%	病院など 29.1%	福祉施設 4.6%	通学 9.2%

図-4 外出希望回数



とからも、身障者にとって、外出への制約は強いと言える。

6. 外出をあきらめた目的およびその理由

あきらめた主な目的は、「買物」が40%と断然多く、次いで「旅行など」、「病院」、「知人の訪問」と続く。また、その理由は、「交通手段がない」、「付添がない」が最も多く、その他交通上の問題としては、「歩行困難」、「段差」、「入口狭い」、「駐車場がない」などが少数ではあるが挙げられた。

7. 外出希望回数

図-4にみるように、目的別外出希望回数は各目的とも、実際の外出回数の1~3倍で、平均では1.45倍となる。また、性別でみると、男性が「通勤・通学」で、女性が「日常の買物」で異性を上回った。但、男女差はない。次に、年齢別でみると、老人の「病院など」、「福祉施設」への希望が強かった。

5. 障害の種類別、級数別外出回数

ここでは、サンプル数の関係から障害の種類として、体幹機能障害を例とし、表-2に示す。この表により、障害の程度を表す級数と外出回数は必ずしも、順位相関が強いとは言えない。(順位相関係数:0.14)

6. 利用補助具別外出回数

ここでは、利用補助具を表-3にみられる6種類とした。但し、「杖1本」には、視覚障害者の白杖も含む。全体的にみると、「電動車椅子」を除き、どの補助具も同様の傾向を示す。「杖1本」の利用者の「通勤・通学」が少いのは、雇用機会が少い「視覚障害者」が多い為である。また、「電動車椅子」利用者は特に、「病院など」が他に比べ多い。

7. 歩行可能距離別、段差の障害度

まず、歩行可能距離別外出回数を主な目的について示した表-4をみると、「日常の買物」では、歩行可能距離が長いグループほど外出回数が多くなり、他のほとんどの目的もこの傾向を示す。また、「病院など」、「散歩・気晴らし」では、「1~200m」歩ける人が最も多く、「歩けない」、「200m」の人々がそれより少くかつ両者とも同程度の外出回数を示す。また、「福祉施設」のように、この逆の傾向を示すものもある。次に、段差の障害度別外出回数を「合計での外出」を例に、表-5に示す。全体的にみて、段差がさくなるほど外出回数は、「越えられる」人はより多く、「越えられない」人はより少くなっている。

8. 各交通手段別介助者必要度別外出回数

介助者の必要度を表-6のように3つに分けた。またここでは、「合計での外出」を例にとりあげる。全体的に介助者の必要度が高いほど外出回数は減っており、これは他の目的でもいえるが、「散歩・気晴らし」、「福祉施設」は異なる傾向を示すので、「電車」の場合を例にとり表-7に掲げた。

9. まとめ

身障者は、外出の主目的は健常者と変わらないが、その回数は、補助具、段差、介助者の有無などの影響を受け、全般的に少なくなっている。

表-2 障害の級数と外出回数(%)

目的\級数	1	2	3
日常の買物	0.082	0.153	0.077
福祉施設	0.033	0.049	0.003
通勤・通学	0.053	0.216	0.000
仕事・商用	0.000	0.028	0.091
合計での外出	0.228	0.301	0.150

表-3 利用補助具別外出回数(%)

目的\補助具	杖1本	杖2本	電動車椅子	手動車イス	その他	用いない
日常の買物	0.264	0.248	0.183	0.105	0.192	0.331
病院など	0.105	0.124	0.328	0.054	0.075	0.068
銀行など	0.021	0.014	0.018	0.010	0.058	0.056
通勤・通学	0.177	0.375	0.000	0.207	0.391	0.406
合計での外出	0.379	0.674	1.000	0.237	0.365	0.514

表-4 歩行可能距離別外出回数(%)

目的\歩行可能距離	歩けない	1~200m	200m以上
日常の買物	0.097	0.164	0.300
病院など	0.043	0.114	0.049
福祉施設	0.046	0.040	0.053
散歩・気晴らし	0.187	0.156	0.148
通勤・通学	0.160	0.270	0.380

表-5 段差の障害度別外出回数(%)

目的\障害度	越えられる	なんとか越えられる	越えられない
歩車道段差	0.494	0.259	0.265
バス・スロープ	0.547	0.389	0.221
駅にある階段	0.559	0.456	0.213

表-6 各交通手段別介助者必要度別外出回数(%)

目的\介助者必要度	必要	いれれば利用できる	いてか利用できない
コミュニティ・キープ	0.478	0.232	0.077
自家用車	0.552	0.294	0.391
バス	0.583	0.347	0.176
電車	0.589	0.296	0.261
徒歩車イス	0.478	0.283	0.135
タクシー	0.436	0.334	0.241

表-7 特別な傾向を示す目的

目的\介助者必要度	必要	いれれば利用できる	いてか利用できない
散歩・気晴らし	0.195	0.217	0.253
福祉施設	0.083	0.032	0.098